

安全検討会におけるこれまでの議論の概要

冬山研修会の必要性

- ・現状を踏まえてリーダー養成の必要性については改めて確認できた。(第3回・飯田座長)
- ・楽しみたいと思ってそのときに参加している人と、理想や夢を求めて登山家を目指している人に二極化している。山岳部等の一番の問題はリーダーを育てられないこと。(第3回・北村委員)
- ・二極化しているクラブのうち意欲はあるけれども十分経験が伝承されていないクラブあたりが一つのターゲットになるのではないか。(第3回・村越委員)
- ・関東周辺を中心に見ていくと、5割から7割ぐらいの大学は冬山で活動していると思う。これはアンケートの通りだと思う。実力は低迷、低下している傾向にある。しかし、現に冬山に行っている学生はいるわけで、それをサポートできるような機能がどこかにあっていいと思う。(第3回・山本協力者)
- ・実力の低下傾向の原因は部員数が減少し、経験・技術等の継承がとぎれたことが大きい。(第3回・橋本委員、山本協力者)
- ・議論の中で、研修会そのものの意義を否定するようなご発言はなかったと理解している。(第2回・飯田座長)
- ・研修会休止中も大学生は冬山に現に行っており、事故も実際に起きている。若い人たちがどのように危険を察知し、その危険をどのようにして回避するかについて、実感することのできる研修会にできないか。(第1回・北村委員)
- ・部内での教育機能が低下しており、それを補完するシステムや組織があってしかるべき。登山を通じて将来の日本を背負う人間を教育・育成するという点で、このような研修会に国が関与する意義は非常に高い。(第1回・山本協力者)

リーダー養成のための冬山研修会の在り方

- ・研修は通常の登山とは異なった教育的な意義を持つものであり、研修はリーダーとして危険を回避する能力を養う場である。(第3回・飯田座長)
- ・これから登山を目指す若い人たちをどう育てるか。研修会は実際の場面でできるための準備。(第1回・北村委員)
- ・何を目的に実際どういう講習をやっているのかということはあるならあるで明確にする。あるいは、ないならないで、まずつくっていくことが大事。それによって、どのような安全対策を講じるかが決まってくる。(第2回・村越委員)
- ・山岳部、ワングル、同好会など研修生のレベルに差がある中で、研修の目的としてどの辺を目指すのかをクリアにした方がよい。(第1回・西村委員)
- ・冬山として身につけておくべき技術や状況判断等の基礎研修となるのではないか。たった1週間では教えられることには限りがある。ヨーロッパの3ヶ月にも及ぶガイドのための研修とは基本的に違う。教育だからどこまでやるかというのではなく、網羅的でも良いのではないか。冬山入門というものになるのでは。(第3回・迫田委員)
- ・いきなり冬山研修ではなくて、レベルを踏んでレベルアップしていくような総合的なシステムが必要なのではないか。(第3回・青山委員、溝手委員)
- ・学ぶ側の要求に応じていくためのシラバスと、それに基づいた標準化された内容の指導を行っていくことが必要。研修内容、実施方法等はそれぞれの状況に応じて、きちんとした判断ができるようなものとすべきである。(第3回・飯田座長)
- ・ある程度事前に準備して(ビデオでここではこういう雪崩が起きる等)、説明しながら順序立てて研修する。経験値のない若い人がどうやって危険を感じられるようになるか。危険を体験するのではなくて、感じられるようになるか。そういう位置づけの研修会ができないか。(第1回・北村委員)
- ・むやみに先行者のトレイルを追わないよう、各班でうまく議論できる形が望ましい。(第1回・尾形代理)

冬山研修会における安全確保に係る基本的な考え方

- ・国が主催する研修は、自己責任の機能する通常の登山とは異なるため、安全を第一に考えるべきではないか。(第1回・溝手委員)
- ・研修会は普通の冬山登山とは別なものと考えるべき。納得できる安全対策を一つずつ積み上げていけば、事故を完全に避けることはできないにせよ、リスクはなるべくゼロに近くなるのではないか。(第1回・迫田委員)
- ・安全確保は当然必要であるが、絶対的な安全を確保してしまうと、研修の教育的効果が低くなり、研修の意義が失われかねない。(第1回・村越委員)
- ・安全性と研修の教育的効果とのバランスの線引きについては、委員によって微妙に違うと思われるため、その点をどう考えるかが最終的には一番重要となってくる。(第2回・村越委員)
- ・この研修は、講習生が危険を回避する能力を実践的に養う場であって、冒険的なものではないという方針をはっきりさせるべき。そうすれば、安全の確保という問題は自然にクリアしていく。登頂し頂上で記念写真を撮ったりして楽しむことが目的ではない。本当の冬山登山を実践するのではないはず。(第2回・北村委員)
- ・この研修会の意義は、チャレンジングな山登りというよりも、リーダーを育てる研修ということが目的であるということによいと思う。(第2回・橋本委員)

研修会の設定（研修場所）

- ・十分調査が行えて実践的な判断ができるリスクの少ない場所。そういう意味では、大日岳も今までの情報を整理すれば安全にやれると思う。冬山前進基地の価値は非常に大きいと考える。若い人、講習を受ける人にとってふさわしい場所であるかという視点で議論すべき。(第2回・北村委員)
- ・大日岳のコースは厳しいところはないし、雪の状態を別とすれば、技術的にはそれほど難しいところではないので、いいところを選んだと思う。コースにポールを立て

てたり、気象観測装置を設置したりすれば、いい会場になるのではないか。(第2回・迫田委員)

- ・30年間同じ場所で研修を実施しており、蓄積したデータがある。新たな場所から研修を始めることは大変。従来どおり、前進基地を使った場所での実施で大丈夫ではないか。(第1回・尾形代理)

研修会の設定（研修時期）

- ・3月の終わりくらいになると、気温が暖かくなってきており、雪質が随分変わってしまうため、研修の目的が果たして達せられるのかという問題がある。かえってより上の方まで行かなくてはいけなくなるのでは。(第2回・西村委員)
- ・研修の理念としてどのような研修を目指すのかということも重要。英仏などは、かなりのレベルの高い研修もやっているが、当然危険性も高い。この点をどう考えるかによって、研修時期等も決まってくる。(第2回・溝手委員)
- ・たとえば2週間くらいずらして3月20日頃にした場合、各学校の春山合宿など年間行事との絡みで、研修生が参加しにくいということはあるのか。天候的な安定等を考えると、3月初旬より中旬以降に実施したほうがよいと思う。(第2回・尾形代理)
- ・正月から2月にかけてと3月中旬以降とでは、後者の方がずっと安定度を増す。すべての大学を調べたわけではないが、多くの大学は2月の終わり、または3月の頭ぐらいから大体2週間から20日間ぐらいの合宿に入る。4月に入ると新人勧誘とぶつかる。(第2回・山本協力者)
- ・4月は新学期であり、大学の授業の関係からして、長期の研修を行うことは難しい。
(第2回・飯田座長)
- ・ここ10年ぐらい、気象や積雪の状況が随分変わってきている。3月上旬が不安定な時期なのであれば、その時期を避けることも検討する必要がある。(第1回・北村委員)

安全情報の収集・蓄積及び提供

- ・実際の冬山と異なり、講師はいろいろな情報を持ちすぎても構わない。講師が研修生を守り、途中でギブアップができる研修会が求められている。(第2回・北村委員)
- ・講師は研修会の要であり、講師に対して雪庇、雪崩などの最新の情報を十分に提供することが重要。(第1回・北村委員)
- ・今回事故が起こって、いろいろな方面からいろいろなグループが大日岳の調査を行っており、データがかなり積み重なっているので、新たなところを探す必要はなく、大日岳で進めていくのがよいのではないか。(第2回・橋本委員)
- ・長期間、同じ場所、同じ時期に研修を実施していたとしても、その情報、データが、1回限りで継続性がなく、データ化されていないということになると、いくら長い間やっても生きてこない。蓄積した情報の共有化のため、ルート上の危険因子に関してテクニカルノートを作成し、研修終了のたびに加筆していれば、ものすごく生きた情報になる。(第2回・尾形代理)
- ・一つの事故が起きる後ろには、幾つかの隠れたヒヤリハットがあると思う。それをもとに安全について検討していけばよいのではないか。現場の声が一番大事。(第2回・橋本委員)
- ・研修山域については、できる限り定量化した情報を収集・提供すべきである。(第3回・青山委員)
- ・登山研修所において、ヒヤリハットの報告書や危険地図を作成したり、上のほうで積雪を観測したり、雪庇を見に行っているなど、大日岳についていろいろな情報が出ているので、その辺の情報が欲しい。(第2回・西村委員)
- ・山頂にポールを設置することは認められないとのことであるが、山岳区域にどういうふうに雪が積もっていくかを調べる上では、実際に積雪深を把握する必要があることから、ポール設置の学術的意義は高い。(第2回・西村委員)

- ・大日岳に行くコースの全コースの中で、どれぐらいの精度で安全度を見ることができたらオーケーなのかどうかについて、具体的に議論していくことが必要ではないか。(第2回・青山委員)
- ・雪崩予測の研究そのものは発展の段階であるため、これは安全であると厳密に言い切れるところはない。しかし、将来的に、大日岳周辺を対象にしていろいろな計算を行う価値はあると思う。(第2回・西村委員)

研修の運営

- ・高い標高域での気象観測を通じて、積雪状況や雪質の変化を予測することにより、いつどの場所がどの程度雪崩の危険があるのかがある程度予測できるような研究が進んでいる。(第2回・西村委員)
- ・山の下方で気象観測を行うことにより、山の上における積雪状況、雪崩リスク等が予測できるシステムが開発されつつある。(第1回・西村委員)
- ・GPSは地表面の特徴のない冬山でも一応正確にナビゲーションすることができる。機種のパフォーマンス、衛星配置、地形、植生、持ち方等の条件がうまくそろえば、誤差は概ね10メートル以下、特に条件がよければ2メートル程度で収まるが、実際に行動する際は、その置かれた条件を把握し、どの程度の誤差が生じるかを事前に予測することが必要。また、正確な利用には、事前にルートログをとっておくことが望ましい。(第2回・村越委員)
- ・一般向けGPSでは5mレベルの精緻な山稜確定を求められると難しい。特殊なGPSでは精度1mのものがあるが、金額が高い。(第1回・村越委員)
- ・新たな知見や最新の機器・用具等の開発を踏まえた安全対策の定期的な見直しが重要。(第1回・迫田委員)
- ・講師が相互にディスカッションしあえる体制づくりが重要。(第1回・尾形代理)

研修内容等の標準化

- ・シラバスを作成する時には学生が何を求めているのかを知ることが必要。教えたい、伝えたいと思っていることにはずれがある。もう一つは日本の登山における安全ということ。日本は山国であり、そこで楽しむ人のためのシラバスができればよい。同時に、世界基準も理解して海外に出ても活躍して欲しい。日本の冬山登山はアルプスやヒマラヤへ行くためのステップでもある。(第3回・北村委員)
- ・座学と実践的な研修とをいかに融合させるかということが重要。(第3回・溝手委員)
- ・参加する研修生に対して、研修内容・指導内容等を具体的に示して募集することが必要である。(第3回・青山委員)
- ・イギリスのプラーシー・ブレニンのMLT (Mountain Leader Training) は日本の文部科学省登山研修所に相当する施設である。7つの研修コースがあり、ML (W) (The Winter Mountain Leader Award) が登山研修所の冬山研修に相当する。研修をどういう形で進めて行くかについて非常に細かいシラバスを作成している。UIAA (国際山岳連盟) では登山用具のほか、指導方法についても「標準化」が進んでいる。(第2回・青山委員)

講師

- ・講師が何をどういうふうに教えるのかということについて標準化するため、教程書なり基準書みたいなものが必要。そういうものがないと、講師は研修生に対して強く指導できず、その場その場で判断してしまう結果、また繰り返し事故は起きる。(第2回・北村委員)
- ・これまでも実施されてきたようであるが、シラバスを実質的に活かしていくためには、ミーティングによる意思統一が重要。(第3回・溝手委員)
- ・登山研修所の従来の安全管理体制がどういうものであったのか、それを踏まえてどういう管理体制が望ましいかについて検討が必要。従来の研修は、講師任せで、講

師によって安全の考え方が異なるなど、システムとして確立したものなかった。
英仏のシステムを参考にしたい。(第2回・溝手委員)

研修生

- ・ 当時も通年での研修会への参加を勧めていたが、学生側の都合もあって不十分であった。夏山研修会を受講済ということに参加要件として徹底しても良いのではないか。(第3回・北村委員)
- ・ 研修目的をどうするかとも絡んでくるが、参加者の経験、登山実績をさらに細かく出させるなり検討するなりして、参加資格をもう少し厳しく見ていくという方向も考えられる。(第2回・山本協力者)
- ・ 大学側から申請があれば全部認めるというのはよくない。そのチェック体制をどのようにしていくか。(第2回・溝手委員)
- ・ 研修生のレベルに応じた指導を行うことは、研修する側にとって幅広い対応が求められる。(第1回・山本協力者)

組織体制等

- ・ 研修所の組織体制についても最終的な報告書に加えて欲しい。(第3回・西村委員)
- ・ 安全には事前の準備が大切であり、それに力を入れていくためには、登山研修所に、山の経験・含めた専従の人を数多く配置することが必要ではないか。(第2回・橋本委員)
- ・ 各分野の専門家をきめ細かく集めて、教育機関のような形にしていくのがよい。(第1回・橋本委員)
- ・ 登山研修所そのものが気象観測や研究ができるような研究機関になることが望ましい。(第2回・西村委員)
- ・ 雪崩の研究員等を有する研究機関をあわせ持った形が一番よい。(第1回・迫田委員)